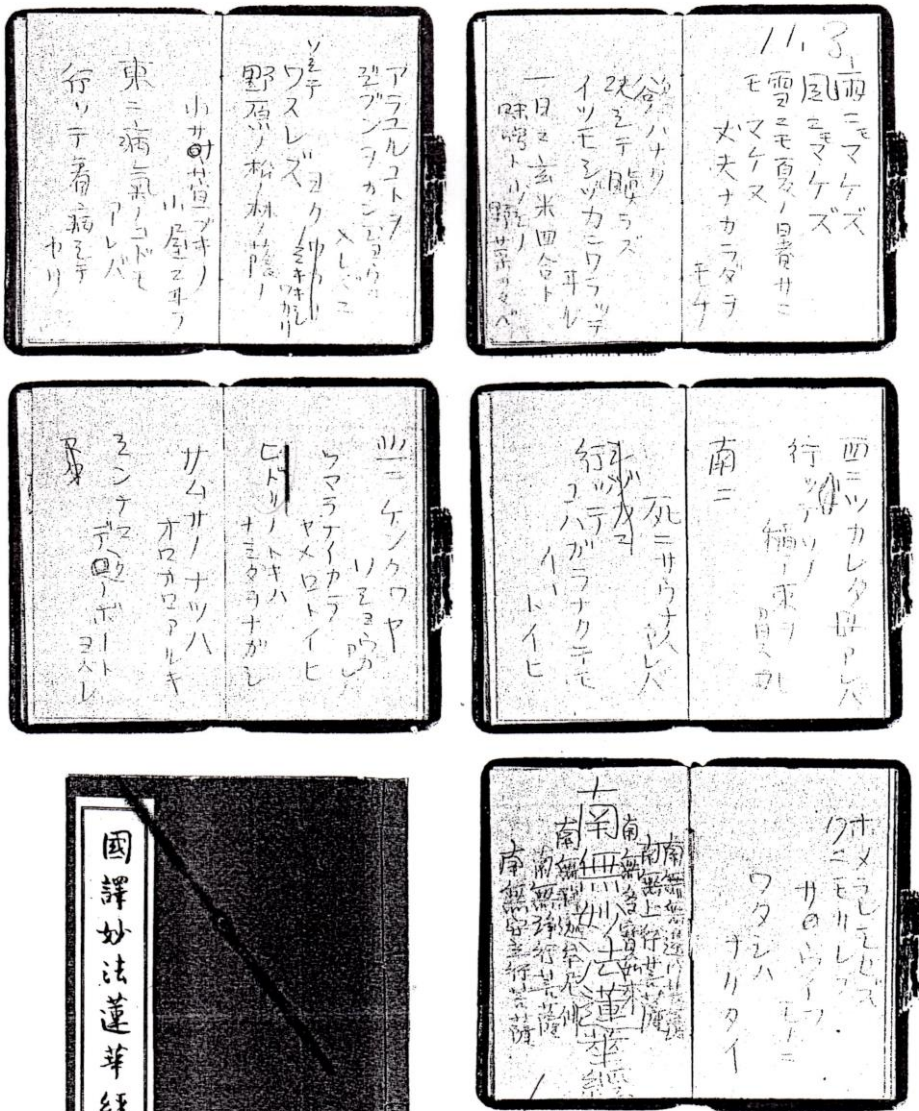


# ちょっと読んでみませんか（平成三十年お盆）

第46話 『宮沢賢治』 （本源寺副住職 本間健司）



「雨ニモマケズ」手帳  
 対外的  
 いのちの連関  
 概念・尊重  
 を表はす  
 宮沢賢治記念館  
 □絵写真提供

遺言により千部作られた「国訳妙法蓮華経」

1/19  
 B

宮沢賢治の『雨ニモマケズ』という詩は、とても有名で、国語の教科書や学校の音読でも用いられていますので、皆さんも一度は耳にしたことがあると思います。実は、この詩は、右の写真にあるように、宮沢賢治が正式に出版したものではなく、賢治が手帳に記していたものを、後世の人が世に出したものです。

わずか三十七歳という若さでこの世を去った賢治ですが、十代後半には熱心な『法華経』の信者となり、その『法華経』への信心を拠り所としながら、農業技術の指導や書物の出版等の活動をしていました。

しかし晩年は大きな病にかかり、その病床のなかで、自分の人生への真の祈り・願いを『法華経』への信仰へと託し、まさに命がけで記したのが『雨ニモマケズ』という詩なのです。

写真を見て分かるように、病の中、命からがら記したものですから、字に乱れがあったり書き直した箇所が何か所もありますよね。本当に、賢治の必死さがひしひしと伝わってくるようです。

ただ、最後のページにある曼荼羅(まんだら)御本尊、特にお題目だけは、非常に丁寧に書かれているところに、賢治の信仰の深さが感じられます。

さて、この『雨ニモマケズ』という詩を、少しでも読みやすいように、現代の仮名遣いで書き替えてみましたので、ぜひ声に出して読んでみてください。

雨にも負けず 風にも負けず 雪にも夏の暑さにも負けぬ 丈夫な体をもち  
欲はなく 決して怒らず いつもしずかに笑っている

一日に玄米四合と 味噌と少しの野菜を食べ

あらゆることを自分を勘定に入れずに よく見聞きして分かり そして忘れず  
野原の松の林の陰の 小さな萱(かや)ぶきの小屋にいて

東に病気の子どもあれば 行つて看病してやり

西に疲れた母あれば 行つてその稲の束を負い

南に死にそうなる人あれば 行つて怖がらなくてもいいと言ひ

北にケンカや訴訟があれば つまらないから止めろと言ひ

日取りのときは涙をながし 寒さの夏はオロオロ歩き

(日雇いで使われている者の辛さを共に悲しみ、冷害による不作でとまどう農民と共に悩むこと)

みんなにデクノボーと呼ばれ 褒められもせず 苦にもされず

そういうものに わたしはなりたい

いかがでしょうか？ 声に出して読むと、心に伝わってくるものがありますか？

さて、詩の最後の方に「デクノボー」という言葉が出てきますよね。この「デクノボー」というのは、ちょうど一年前のお盆のプリントでお話した、法華経第二十章に登場する「常不軽菩薩(じょうぶけいぼさつ)」をモデルにしていると考えられています。

「常不軽菩薩」覚えていらっしやいますか。

会う人会う人に合掌し、「あなたは必ず仏となる尊い方だ」という言葉を、棒で叩かれようが石を投げつけられようが、ずっと唱え続けた菩薩様であり、それはお釈迦様の過去世のお姿でもありました。

命尽きるその前に、その「常不軽菩薩」のような生き方を願った賢治の心は、きっと雑念や我欲を全て捨て去り、『法華経』信仰者としての強い自負だけがあったのだと思います。

もちろん、賢治が詩の中で言っていることは、現代の私たちが、簡単に実践できる内容ではありません。

ただ、『法華経』を信仰し続けてきた賢治が、人に見せるためでもなく、ひたすら自分の手帳に「他者への絶対尊重」の想いを書き記せた、その心・魂は、三十七歳という短い生涯ながら、最高に充実した境地だったんじゃないかと私は思うのです。

あまりに賢治の足元にも及ばなくて恐縮なのですが、毎朝のお勤めの何日かに一度、『雨ニモマケズ』を朗読させて頂くことにしました。

早かれ遅かれ命は尽きるわけですから、賢治の功德を拝借し、自分を戒めながら、少しでも心に“種まき”をしていければ、との思いで。

雨ニモマケズ、風ニモマケズ：

合掌 南無妙法蓮華経